



2014年特別号 2014年5月1日
東洋英和女学院大学図書館

WELL 教員インタビュー第3回 渡辺和子先生

今年2月、WELLのメンバー6名が渡辺和子先生にインタビューを実施。

英和の教員となったきっかけ、ドイツ留学、研究者としての楽しみ、独自の宗教観などなど…

授業ではなかなか聞けないけれど聞いてみたいと思っていたことをたくさん伺いました。

私達の人生に目標があるとすれば、何を手に入れること?? → その答えはこの中に!

◎渡辺先生

●WELLメンバー： 人間科学科4年の内田弘美さん、高橋礼華さん、矢野友有美さん。人間科学科2年の大島悠実さん、大豆生田茉莉花さん、森沙弥佳さん。(学年はインタビュー当時のものです。)

●今日はぜひ渡辺先生にインタビューしたいということで、6名のWELLのメンバーが集まりました。貴重なお時間をいただきありがとうございます。短い時間ではありますが、一人ずつ質問を考えてきたので、質問をさせて頂きながら、内容の濃い時間を過ごしていけたらと思います。よろしくお願いいたします。

●先生は、なぜ英和で教えたいと思ったのですか？

◎他の先生方もそうかもしれませんが、ここで教えたいと思って就職できるわけではなくて、誰かから声をかけてもらって就職するという時代でした。今は公募制も多く、履歴書と業績書を出して、審査に通れば就職できる場合があります。

この大学は1989年に開学しましたので、教員全員が新しく決められたわけです。まず大学構想を作って文科省(当時の文部省)に出して、教員案が審査されます。大学開学の審査は結構厳しいです。私

の場合は留学から帰ったばかりでしたが、私の指導教官の一人から声をかけていただいて書類を出しました。私の就職は開学後から1年後の1990年でした。

私の場合は、最初から大学の先生になりたいということではなくて、学び続けたいと思っていました。知りたいことをとことん調べてみたかったので長く勉強しました。ざっくりいうと、日本で8年間大学に行き、その後ドイツで7年半大学に行き、学位論文を提出しましたが、そのころには30ウン歳。その時、私が一生懸命勉強をするとこんなものかという、ある到達点というものを実感しました。30半ばになって日本に帰ってくるわけですけど、これからは自分のためだけではなく人のために生きられるなと思いました。



たとえば、自分は勉強をしたいけど結婚しているから出来ない、子供がいるから出来ないとか不平を言って生きてゆく人になりたくなくて、できなかったら全部自分のせいだという環境を作っておいて、思いっきりやってみたかった。それは良かったと思います。

帰国してからここに就職が決まる前に非常勤講師をやりましたが、最初に聖心女子大に行きました。皆さんもかわいいですが、18~19 くらいの女性が一生懸命勉強しているって、かわいいなと思いました。それは私の 15 年前の状況と同じなわけです。当時は一生懸命、余裕もなくやっていて、傍から見たらかわいいと見えるなんて夢にも思わない。だけど、自分が学生の前に立つと、ああかわいいなあと思えることが感動でした。それは私が長く修業した成果としての感慨だと思いました。

今まで東洋英和に 24 年いますが、学生さんから学ばせていただくというのがモットーです。初めにどうしたら学生に怒らずにいられるかと考え、学生から学ばばいいと思いましたので実践しています。24 年間ね。だから私の授業は、ゼミもそうですけど、学生さんの発表が多いでしょ？私が学ぼうと思っっているからなのです。(笑)。この前、礼拝の週報にも「学生から学ぶ」という短文を書きました。でも学生から学ぶというのは簡単ではないです。学生に好きなことを調べて発表してって言ったら、教師が楽しんでいる感じがするでしょうが、本当は楽しくないです。特に最初は、やはり予習をしないと質問もできないし、コメントも付けられないと思うでしょ。だから、学生さんに来週何やるの？とか聞いて、本を読んだりしていました。でも何年かやるうちに、あのテーマねと思えるようなことが多くなってきて、知識も増えて多くのことに興味をもてるようになってきたのです。いろいろ楽しめると充実感もあって、学生さんもお互いに学んでいるみたいなので良いと思います。

お互いの発表でお互いが学ぶというやり方をしようと思ったのは、私自身がそういうゼミで育ったからです。それが宗教学という場所でした。皆さんは授業に出て、宗教学の範囲が広いというのは分かっ

てくれていると思いますけど。私が出た、特に大学院がそうでした。そこでは毎週、宗教学の大学院生たちが、修士論文を書くために自分のテーマで発表をします。古今東西のことが扱われるので毎週全く違うテーマになります。合同ゼミなので先生たち 4 人くらいと、大学院生が全部並んで、皆が何か自分のテーマと共通点を見つけて質問しようという風に参加するのですね、それで鍛えられたという気はしています。お互いに学び合うということが成り立つと良いですよ。

●ありがとうございます。今、学び続けるというテーマが出てきましたが、これに関して質問ありますか？

●学ぶということに関係していますが、先生は、アツカド語とか英語とかいろいろな言語を話せると思いますが…。

◎あなたも、授業でアツカド語を学びましたね。素晴らしい。楔形文字書かされて…。

●はい。それで、いろいろな言語がありますが、それぞれ言語を学んでいく上で、ポイントというものはありますか？

◎語学はね、これ一つ。必要性がなければ身に付きません。必要性にもいろいろあって、試験に必要というのもあるでしょうが。

初めに本を挙げておきますね。『私が出会った一冊の本』^①という本は、そのテーマで、生涯学習センター10 周年記念のときに連続講座のようにして、いろいろな先生方が話したのです。その時に私は『ヨブ記』を選んだわけです。

少し昔の話になりますが、私は小学校5年の時に、父の転勤で東京から札幌へ引っ越しました。新しいクラスに入ってできた友達の一人が日曜日に教会学校へ通っていることを知ってすごく興味をもちました。私もどうしても行きたいと思い、早速次の週から教会学校に連れて行ってもらって、『聖書』のお話を聞きました。面白くて毎週通いました。その後、広島、そして名古屋へと引っ越しましたが、いつも教会学校には通って、高3のクリスマスに洗礼を受けました。

大学では一番興味をもっていた『聖書』の勉強を

したいと思いましたが、旧約聖書は宗教学科、新約聖書は西洋古典学科で学びました。私は旧約聖書の『ヨブ記』のような知恵文学や預言書に深いものがあると思って、旧約聖書を選び、宗教学科に進学することにしました。修士論文は『申命記』について書きましたが、その時に旧約聖書だけではだめで、広く当時の周りの世界、古代オリエントのことを学ばないといけないと気づきました。それは主にアッカド語の世界でしたが、当時の日本ではまだ本格的に学べなかったので、博士課程に入ってからドイツのハイデルベルグ大学に留学しました。

そこでは18、19の学生たちにまざってアッカド語を習い、古代メソポタミアで書かれた楔形文字文書を研究するアッシリア学を専攻しました。アッカド語よりも古いシュメール語も一緒にやりました。アッシリア学の場合は他に2つの副専攻が必要だったので、それまでやってきた旧約聖書学と、新たにセム語学を選びました。セム語学というのはセム系言語を学ぶのですが、セム系言語のアッカド語とヘブライ語のほかに、アラム語、シリア語、アラビア語等をやりまして、ほかにも学位をとるためのラテン語があったわけです。週5日に7個くらい違う語学があるのです。それをドイツ語で習います。ドイツ語はとても難しかったです、要するに必要性ですね。ドイツでの語学試験は、筆記試験のほかに必ず面接試験があります。ヘブライ語の試験でも、旧約聖書原文の一部が目前に出されて、それをその場でドイツ語に訳すのです。ラテン語の試験でもそうでしたけど。さっきも学び続けるのが大事と言いましたけど、そのためには恥をかき続けるべきだと思うのですね。外国行ったらどうしても恥をかくわけです。言葉がわからないし。若い時から恥をかくことに慣れたら、年をとっても恥をかいて学び続けられるかと思えます。

●それはよく思えます。若いときだったら取り返しがつくことも、成長していくうちに…。

◎人間は年を取っても利口になるとは限りません。皆さん、これから長い人生でいろんな人に会いますが、一般的に威張っている人は勉強していないし中身がない。恥をかきたくないと思っていると

ころが問題です。学び続けている人は威張っていないと思う。若いのに威張っていたら、もう絶望的ですね。

最近の本で『他人を見下す若者たち』^②というタイトルの本もあります。例えば、私より確実に30歳以上は若いような方が、私の発表したことに対して、見下したコメントを平気でつけるのですよ。びっくりしますね。あとはもう同情ですけど。若いから知らないこともあるけども、年を取っているから知らないこともありますよね、だから若者は年寄りを見下すのを馬鹿にしたりするのでしょうか。これから長い人生をどうやって生きていくのだろうと思います。若者がある種の万能感を持って、他人を見下して良いと思うのは、何か起きていますね、日本に。東洋英和の学生は、面と向かって先生を罵倒するということはないから、先生方はあまり感じてないかもしれないけども。

●個人的には、見下されて育つと、他人を見下す癖がつくと思います。

◎なるほど。どこかにお手本はありますよね。反面教師にすれば良かったのですがね。

●逆に、卑屈に育ってしまつて、他人を見下さないと自分が保てないということがあるように思います。

◎そこで見抜いてください。自分に内容が無いという引け目から攻撃に出ることが習慣になってしまうと、大人になってからもやってしまう。「若いときから恥かいて学ぼう」、「自分を偉いと思うな」とかをスローガンにして、生きていった方が良いかも知れない。例えば誰も褒めてくれなくても神様は見ているとか、お天道様は見ているとか、という生き方は大事です。朝ドラの『梅ちゃん先生』のセリフにありましたが、「頑張っていたら神様にご褒美くれる」とか、キリスト教的に言うと「天に宝(富)を積む」(マタイによる福音書 19:21)ですね。簡単ではないですが、この世での評価がすべてと思わないことは大事です。自分に内容があれば人を馬鹿にしなくてすむ。人を馬鹿にする人、威張る人は、認められたいと願っているのに、どこかで学ぶチャンスを失って、恥をかけなくなっているのでしょうか。

そうそう、アッカド語の話でしたね。私はアッカ

ド語を勉強してみたら、これだと思うようになりました。今までの歴史の勉強や人間の歴史って、教科書では古代ギリシア、ローマ時代ぐらいから始まっている。つまり2千5百年ぐらいの人間の歴史を見ているのですね。でもそこにアッカド語を入れるとさらに2千5百年さかのぼって5千年になります。歴史が2倍になると何が起こるか。日本ではまだ一部の人が信じないけども、全部の学問がやり直しになります。文学、歴史、法律、政治、社会、経済、その他すべてについて、今までわかっていることの“前史”があるわけですよ。だから私がよく言うのは、いつの日かアッカド語が大学で必修になる日がくるといことです。(笑い)

アッカド語をやった良かった。これは日本で言うのと皆笑うけども、ヨーロッパでは結構本気でそう考える若い人が増えています。私にとってもこれほどやりがいがあることはないから。これほど新発見が多い分野もほとんどないし。

欧米でも多くの若い研究者に定職があるとは言えない。日本より深刻で、いくら優秀でも就職できないという現実があります。それでも古代メソポタミアの研究をしている人たちが集まる国際アッシリア学会へ行ってみると、30代、40代の定職が無い人がいっぱい来ています。

去年の7月に国際アッシリア学会があつてベルギーへ行つた時、夕方に学会が終わって、誰かが「アイス食べに行こうか」ということになって、5~6人で行つたんですよ。そこである男性が、カップにアイスを3つも入れてもらっていたから、たくさん食べるのねと思っていたら、彼は「これが今日の最初の食事」と言いました。つまり、朝も昼も抜いて学会に出て、夕方になって初めてそれを食べている。定職がなくても、節約して学会の参加費、交通費、宿泊費などを払って来ているわけです。それを見て本当に深刻だと思いました。彼らはすでに一流の学者なのです。だから職のある人はそれぞれが出来ることはしなきゃいけないと思いましたね。そこで私がアイス奢ってあげればいってという話じゃないです。(笑い)

『ギルガメシュ叙事詩』^③がアッカド語で書かれ

ていますから、授業の中でも紹介していますが、私のライフワークの一つです。人生経験と共に深く読めるようになるので、ずっと翻訳作業を続けています。いつ完成するやらという感じですけどね。

●ありがとうございます。アッカド語は、私はまだ習ってないので少し難しいお話ではあったのですが、すごく興味深くて面白そうだなと思いました。

◎機会があれば是非。

●ありがとうございます。

●宗教の選択は個人ですべきだと思いますか。

◎うーん、人間を救う力のあるものを宗教というと私は思っているのね。つまりこれは私がとる宗教学の、非常に広い宗教の定義ね。救いには、自分が解放されるとか、充実感に満たされるとか、生きがいがあるとか、力をもらえるとか。そういう全てポジティブなものであるわけです。だから「〇〇教」でなくても、「あー、幸せだな」って思える生き方ができればよろしいと思いますけど。そうではない場合はニセ宗教的なものに頼っているかな。キリスト教でも何教でも、無理やり放り込まれてしまったら、すごく嫌でしょう。この宗教ならOKというのはありませんが、それぞれの宗教には良いところがあるので、その良さが生かされると幸せになれるですよ。

●ありがとうございます。

●宗教について、私からも質問です。例えば私は「宗教」と聞くと、あんまり良いものに感じなくて、何かに頼っているのではとってしまうのですが、それについてはどうお考えになりますか？

◎何も信じていないといつても、人間は必ず何かに頼ると思います。親の言うことであつたり、お金であつたり地位であつたり。ただ、頼っていたものが崩れてしまうことはありますよね。お金が無くなって絶望したり、地位が無くなって生きる意味を失ったりします。その時に、大事なものはこれじゃなかったんだと気づいて、次の目標が見つければ良い。人間はこれ以外の生き方って出来ないと思います。いつでも自分にとって大切なものを見つける努力をしていけば良いと思いますね。

私は小学校5年生から教会学校へ行つて、『聖書』

って面白いなと思ったから学び続けて 18 才の時に洗礼を受けているわけです。そしてキリスト教と『聖書』の勉強がしたくて宗教学を選びました。が、宗教学では古今東西のすべての宗教現象が対象になるので、本当に大変でしたけど、宗教学を選択したことは私の人生にとって一番良かったですね。キリスト教徒は何よりも謙虚でなければいけないことがよくわかってきます。

ある時期、私は、神様からお暇をもらうというか、問い直しをする心の旅に出たいと思いました。「ちょっとこの信仰はお預けにして、旅に出てまいります。戻ってくるか、いつ戻ってくるかは保障できません。でも、私がこの問い直しの旅に出ることによって、神様の方が危うくなるなら大した宗教じゃございませんね」と心の中で神様に申し上げて旅に出ました。それは長い旅でした。でも私がどう考えようか、あるものはあるし、求めるべき良いものはあります。ですから押し付けられたものではなく、地球上の多くの宗教や、多くの人々の救われ方を知ろうとするのはすごく大事です。

いろんな主義主張があって、グループを作ったり、教祖や指導者、政治家や皇帝を作っていますけど、人間の救われ方は昔からあんまり変わっていないです。権力や名誉が好きなのは、共産主義ではどうなるのか、会社を経営するとどうなるのか、教祖をやるとうどうなるかなど、無限に例があると思います。だから疑似宗教に陥る危険はいつもあります。時間はかかりましたが、私の旅の結果として、これってニセモノかなとか、そんなに深くないなということがだんだん分かるようになりました。この人は何を理想として生きているのだろうということを、まず考えます。だから宗教とは特定の“〇〇教”ではないです。

●ありがとうございます。宗教という思想のお話や考え方について学ぶことができました。

●私は普段、教員としての渡辺先生しか見ていませんが、先生にとって大学には、教育機関としての面と、研究機関としての面があると思います。研究者としての大変さ、または楽しさは何ですか？

◎ふふふ。私は 24 年間ここにいて、今思うとすごく勉強になったと思っているのですよ。先ほど、私の一生を決めた本として『ヨブ記』を挙げました。これまでは 3 年生以上が履修できることになっている「宗教文化比較演習」の講義の中で、『ヨブ記』をテーマにしています。その授業の最後に『ヨブ記』と他の作品とを比較するレポートを書くわけです。そうすると皆がそれぞれの作品で比べるので、全部オリジナルのレポートが出来て、学生さんから学ぶことができます。『ヨブ記』のテーマを、私の知らない映画や作品とかと比べてくれるわけです。二年生のゼミでは、前期には「ジブリ作品を論じる」で、後期には「自分のイチオシの作品を論じる」というテーマでやっています。それがまた面白いので、得していますよね、私も。

●私は今、メディアの情報の流し方というか、事実が正しく報道されているかどうかという点に興味があるのですが、英和では勉強できないように感じています。どうやって勉強をすれば良いでしょうか？

◎情報操作はよく起こることなので、何を明らかにしたいのかな。例えば一対一で話し合っても通じないことってあるでしょ。でも一生懸命に話したり、勉強したら分かるようになるとか、分かり方ってたくさんあります。一対一でも難しいのに、何百万対何百万とか、言語が違うとか、翻訳者が間違えたとか、色々あるわけで、相互理解は本当に難しい。

私達が授業でやっている練習は、書かれたものをどう考えるかからやって、『聖書』でも行間を読もうとします。小説でも作者の言いたいことがはっきり書いてあるわけじゃなくて、登場人物がどういう気持ちでこの言葉を言っているのかを考える必要があります。情報操作をする人の考えも理解できなさいいけないわけですが、何であつても人間理解の問題につながるので、色々勉強してください。

今日は本の話なので本を例にしますね。これは『南京玉』^④という本。金子みすゞさんは、当時 3 歳の娘ふさえさんを残して自殺をしますが、『南京玉』は、当時 3 歳の娘が話す片言の言葉を書き留めた手帳につけた名前でした。この手帳の最後の方に「この頃

ふさえ我と遊ばず」と書いてあるのです。ふさえさんは、当時3歳だったのでお母さんの記憶はほとんどないけれど、形見としてこの手帳を持っていて、ちょうど開いた時に最後の方を見ちゃったのね。そして「この頃我と遊ばず」とあるのを見て、「お母さんは私を愛してなかったから遊んでくれなかったんだ、だからお母さんは私をおいて一人で死んでしまった」と思っていました。

みすゞさんは1930年に亡くなりますが、その後50年以上経ってから、矢崎さんという人がみすゞさんの詩を再発見して出版していく仕事をしたのです。ふさえさんが50代になってから、お母さんのことが有名になって、そのうちに『南京玉』も出版したいということになりました。そこでふさえさんが初めて『南京玉』を読み直し、書き写したそうです。そうしたら最初に次のように書いてあります。

「なんきんだまは、七色だ。一つ一つが愛らしい、尊いものではないけれど、それを糸につなぐのは、私にはたのしい。この子の言葉もそのやうに、一つ一つが愛らしい。人にはなんでもないけれど、それを書いてゆくことは、私には、何ものにもかへがたい、たのしさだ。」¹

そのほかにもお母さんの愛が感じられる頁が多いです。ふさえさんは、「私は捨てられた」とずっと思ってきましたが、「70を過ぎて今本当に初めて親子になれたというか親の愛を感じる」と言っています。お母さんが生きていれば口頭で、別の説明ができたでしょう。または『南京玉』の中に、私はふさえと遊びたいけれども、今はおばあちゃん（みすゞさんのお母さん）の方になついているから、自分とはなかなか遊んでくれなくて寂しいと書いてあれば、ふさえさんも分かったでしょう。でも愛されていなかったという思いが、ふさえさんを70年間支配したわけです。これは操作ではないですが、愛されていなかったというのと、すごく愛されていたというのは大違い。

¹ 『南京玉：娘ふさえ・三歳の言葉の記録』 / 金子みすゞ, 上村ふさえ著, JULA 出版局, 2003, 巻頭より引用。

ふさえさんは、結婚して子供ができて、苦しいときでも自分は死なないで子供を育てて、そして孫も出来てから分かってきたことがあると言います。金子みすゞさんの詩を出版した矢崎さんから「あなたは子供を置いて死ねますか？」と聞かれて、それは難しい、とても出来ないと感じたときにお母さんの気持ちが分かってきたと言います。ひどいお母さんだから私を捨てたって思っていたのに、大変な苦悩のなかで、母は私を愛していたからこそ、生かしてくれた、それで自分の命が次の世代の命に繋がったのだということが、『南京玉』を読み直して分かるわけです。分かり方も経験と気づきからどんどん進むので、人間は一生考えなおし、読み直しながら理解を変えていくのでしょうか。

今回、「宗教学概論」の授業では通過儀礼のテーマに力を入れました。その中で、絵本『だいじょうぶだよ、ゾウさん』^⑤も使いました。ネズミくんの友達に年老いたゾウさんがいます。ゾウさんは死ぬ時期が近いので、ゾウの死者の国へいかなきゃいけない。ネズミくんは、嫌がっていましたが、段々受け入れられるようになる。死者の国に行くには、つり橋を渡らなきゃいけないのに、それが壊れている。ある時ネズミくんが、ゾウさんのために橋を直してあげます。ゾウさんが行く時になって、「大丈夫だよ、ちゃんと直したから」って言ってあげられるという内容。ネズミくんの成長が描かれているのですが、自分が変わると、それまでとは違う事がわかってくる。通過儀礼ってそういうことかと思えます。

絵本『くまとやまねこ』^⑥も以前に保育専攻の学生さんが教えてくれましたが、これもなかなか良いです。くまの友達のことりが死んでしまうのですが、くまはなかなか立ち直れなくて、引きこもってしまいます。でもある日、やまねこに出会ったことで、くまは生きる力を得ます。それを可能にしたのは、やまねこが持っていた何かです。はっきりとはいわれていないのですが、やまねこが自分の体験を通して得ていた何かです。絵本ですが、死別の悲しみ、喪に服すこと、喪が明けることなどについて考えさせられます。

それから『おもかげ復元師の震災絵日記』^⑦という本があります。著者である女性納棺師の笹原さんが3.11の震災の時にボランティアで津波犠牲者のおもかげを復元するという内容。汚れた髪を洗って、女性にはお化粧したりして、その人らしい表情にもどして、家族とお別れの時間がもてるようにする。人の思いが分かるから、死者と遺族の間で最期のお別れができるようにお手伝いができる。

私も、ずっと取り組んでいる『ギルガメシュ叙事詩』を読んでいると、毎回違うことに気づいて感動します。それは、私自身が変わったので、この叙事詩の深さに気づいたということでもありますが、もともとこの叙事詩には深さがあり、もっと深いところには私はまだ達していないということなのでしょう。この叙事詩は、古代人ギルガメシュが、生と死の問題に正面から取り組んだという物語です。何も恐れていなかったギルガメシュが、親友のエンキドゥが死んでしまうと、深い悲しみに沈み、また死の恐怖におびえて、永遠の命を得る方法を求めて異界への旅に出ます。ギルガメシュはまるで現代人のようで、人間は4、5千年くらいでは大きく変わることはないようです。

●ありがとうございます

◎どこでも、どんなことでも勉強して行って下さい。私はとことん勉強しましょうという主義ですが、最近経済事情が厳しくて、就職を優先する人が増えていてちょっと残念です。勉強する環境があればやって欲しいです。自分の考えを発表して、他の人の意見を聞く、批判してもらうことが大事です。批判されたことがない人は育たないし、甘い。勉強するのなら学会発表を続けて、批判してもらえらううちに批判してもらいましょう。偉くなりすぎると何も言ってもらえなくなるから怖いんです。それから女子大生はおとなし過ぎると思います。大学ではもう少し文句を言わないと。

◎『ハウルの動く城』^⑧の解釈を、今年卒業した私のゼミ生が卒論に書いて発表していました。このアニメには、新しい共同体を作るというテーマがあると。いろいろな人がいて、血筋に深い縁があって、

家族や親子で仲良くしている人もいるでしょう。でもソフィーは、突然90歳になって家を出て、新しい共同体を作って一緒に生きていく。ソフィーは血縁関係よりも、ハウルやその周りの人々と縁があったのだと思います。ソフィーの驚くべきところは、荒地の魔女の老人介護もやっちゃうし、子供の面倒とか、犬の面倒とか、みんな見ちゃうところ。『千と千尋の神隠し』^⑨では、千尋がカオナシに「一緒においで」と言えるところもすごいでしょ。

●銭婆のところに。

◎そう。そしたら銭婆がカオナシを預かってくれた。卒論でも『千と千尋の神隠し』をテーマにした学生がいました。人間科学科総合人間学コースの卒業研究発表会(2014年1月末)でのパネル発表の時に、その学生と話していて、ポイントはニガ団子をもらえるかどうかだと話し合いました。千尋はオクサレ様からニガ団子をもらい、そのニガ団子の使い方が分かる子なの。ハクに半分あげて、もう半分はカオナシにあげている。「お父さんとお母さんにあげようと思ったけど、あなたにあげる」って言える。オクサレ様が偉い河の神だって知っていたら、みんな寄ってくるでしょう。汚くて臭くても千尋は一生懸命やった。だからあのニガ団子がもらえた。最近私は、オクサレ様はもしかするとハクのお父さんかもしれないと勝手に想像しています。ハクも河だし。千尋があの世界に入れたのはハクと縁があるからだと思う。それから『ハウルの動く城』ではハウルがソフィーに言います。「待たせたね」って、最初に会ったときに。

●縁が繋がって。

◎そう、縁があるハクがいたから千尋はあそこに行けた。ハクは千尋の名前を昔から知っているって言っていましたね。自分の名前は忘れたのに。私達の人生に目標があるとすれば、ニガ団子を手にいれること、そしてその使い方を間違えないこと。それ切り刻んで売ろうとかかそういうことを考えない。

●いいお言葉ですね

◎「大歳(おとし)の客」^⑩という昔話があります。大みそかに貧しい旅人が訪ねてきて、一夜の宿を乞う。その家も貧しいが、その旅人を泊めて食べ

物を恵んであげたら、次の日である元旦に旅人が多くの小判に変わっていたという話。その他、いっぱい良いものをくれたとか、お金とかくれたとか、いろいろなバリエーションがあります。本学第1期生で私のゼミ生の一人（1993年3月卒業）が「大歳の客」について卒論を書いていました。これは、福の神がどのような姿をして訪ねてくるかわからないということですね。私はオクサレ様の話も「大歳の客」に似た話型をもっていると思います。一番大事なものは臭くて汚いかもしれない。そうすると、求めるべきものは何か分かりにくいですね。マザー・テレサは全部の貧しい人がイエス・キリストに見えていたといいます。だからあの人は貧しい人に仕えていた。“やってあげる”ではない。

●今日は短いお時間ではありましたが、すごく内容の濃い時間を過ごさせていただき、本当にありがとうございました。



渡辺和子先生略歴

東京大学文学部宗教学科卒業（文学士）。同修士課程修了（文学修士）。同博士課程中退。ハイデルベルク大学アッシリア学科修了（Dr. phil.）。現在の関心事は宗教学、死生学、神話学、旧約聖書、宗教思想などの研究、古代メソポタミアの粘土板に書かれたアッカド語文書の研究（アッシリア学）など。1990年から東洋英和女学院大学に奉職。

◆♥♣ 今回ご紹介頂いた資料 ◆♥♣

- ① 『私が出会った一冊の本』 / 太田良子, 原島正編, 新曜社, 2008.
- ② 『他人を見下す若者たち』 / 速水敏彦著, 講談社, 2006.
- ③ 『ギルガメシュ叙事詩』 / 矢島文夫訳, 筑摩書房, 1998.
- ④ 『南京玉：娘ふさえ・三歳の言葉の記録』 / 金子みすゞ, 上村ふさえ著, JULA 出版局, 2003.
- ⑤ 『だいじょうぶだよ、ゾウさん』 / ローレンス・ブルギニョン作；ヴァレリー・ダール絵；柳田邦男訳, 文溪堂, 2005.
- ⑥ 『くまとやまねこ』 / 湯本香樹実ぶん；酒井駒子え, 河出書房新社, 2008.
- ⑦ 『おもかげ復元師の震災絵日記』 / 笹原留似子著, ポプラ社, 2012.
- ⑧ 『ハウルの動く城 [DVD]』 / 宮崎駿脚本・監督；ダイアナ・ウィン・ジョーンズ原作；スタジオジブリ制作, c2004.
- ⑨ 『千と千尋の神隠し [DVD]』 / 宮崎駿原作・脚本・監督, スタジオジブリ制作, c2001.
- ⑩ 『全国昔話資料集成 27 但馬昔話集』 / 谷垣桂蔵編著, 岩崎美術社, 1978.

♪♪ 全て図書館で所蔵しています。♪♪

◇◇ 謝辞 ◇◇

今回の『図書館だより』を発行するにあたって、渡辺和子先生には、最後の文章校正まで多大なるご協力を頂きました。心より感謝申し上げます。また人間科学科 3 年の大豆生田茉莉花さん、森沙弥佳さんにはテープ起こしを担当して頂きました。お二人のご協力にも感謝申し上げます。ありがとうございました。

大学図書館司書： 青山・池上